

懐良親王の御西下と阿蘇氏

古藤田 太

(会員・南海部郡弥生町)

(一) はじめに

南北朝争乱期に於て、佐伯氏は、主家大友氏が北朝方(武家方)に加担したのに対し、南朝方として活躍することが多かった。

九州南朝方の中心、懐良親王かねながの九州ご西下について述べてみたい。問題の核心は、親王一行が最初に到着された「九州東海岸」とはどこを指すのだろうか。資料の無いこの問題を皆さんと考えてみたい。

(二) 懐良親王の九州派遣

足利尊氏は、光明天皇こうみょうから征夷大將軍に任せられ、京都室町に室町幕府を開き、後醍醐天皇は吉野に潜行されて南朝を開き、こうして日本の南北朝争乱が始まった。

後醍醐天皇は、延元元年(一三三六)から恒良・尊良たかなが

の二親王を北陸に、宗良親王を伊勢へ、義良親王のりながを奥州へ派遣されて、南朝勢力の復興を図られた。

九州へは懐良親王(当時十二才)を派遣されることになり、補佐役として勘解由次官(勘解由かげゆというのは、往昔、国司交替の時、財政面の監査をする職で、ここでは単なる官名)五条頼元が加わり、一行十二名でご西下なされた。

天皇は、この征西將軍の派遣に先だって肥後の阿蘇惟時に対し、

「懐良親王に属して忠節を尽すように」

という諭旨を下された。

延元三年(一三三八)、親王一行は紀伊から讃岐へ渡り、更に九州へ渡らんとする計画であったようである。

ここで親王は、阿蘇惟時に「九州御渡海」の御案内を依

頼された。依頼の令旨を受けた阿蘇惟時の心中は複雑なものがあつたと思う。

先の元弘の乱（一一三三—一一三三）には、一族を率いて上京し、建武二年（一一三五）の尊氏謀叛の際は、菊池武重と共に箱根・竹下に戦い、その働きに依り薩摩の満家院、伊集院の守護職に任ぜられたが、北朝方の島津方に取り囲まれてはとうにもならず、建武三年の多々良浜の戦には惟直・惟成の二人の男子を戦死させ、尊氏上京の際は、累代の家督のみが補任されていた大宮司職を尊氏の御教書で、阿蘇家の庶子家孫熊丸に与えられたという不満やるかたなき頃で、天皇の綸旨と雖も容易に御引受けすることはできなかつた。

頼みとする阿蘇惟時がこのような情勢にあつたので、やむなく親王一行は、かねて南朝方と知らるる伊豫の土居通世（旧久米郡石井郷土居）や、得能通綱（旧桑村郡得能庄）を頼つたが、かつて共に連合して反幕に立ち上つたことがあり、また彼等より強大な忽那氏を頼つて瀬戸内海の忽那島に渡つて行つた。

（三）忽那島

忽那島は、現在の四国北条市の沖合に並ぶ忽那七島と呼ばれる島である。後白河法皇の荘園で、国役を免除された名高い長講堂領である。

この小さい忽那島においてさえ、南朝・北朝勢力に分れて戦いはやむひまもなかつたが、北朝方の忽那重清が死去した延元三年頃から、南朝加担の弟義範が忽那氏を代表するようになってきて、懐良親王一行は忽那島に渡られたのである。

ここに辛苦の三年間を過ごされたが、翌年の延元四年八月、親王は父君後醍醐天皇崩御の悲報を受けられたがどうすることもできなかった。後年親王は、父後醍醐天皇と母君靈照院禅定尼御供養のため、八代市妙見町大平山中腹に陵墓小袖塚を建てられた。

全国的に見て、宮方に属する諸將の多くは、延元年中に死去し、興国初年は、南朝方にとって極めて不振の情勢を迎えんとしていた。南朝方の中核となつていた菊池氏でも、この頃武敏は病に倒れていた。

親王に従う一行は、五条頼元、その子の良遠、孫の頼治、中院内大臣冷泉持房（北畠親房の弟）、中院義定以下総勢十二名であつた。親王達は、絶えず九州の情況に

目を配って、九州渡海の日を待っていた。

その頃、南朝方北畠親房の水軍政策では、奥羽の諸国瀬戸内海沿岸および九州地方の経営に力を尽し、北朝方の活動を封じようと考え、その為には伊勢の大湊を水軍の根拠地と定め、官方とも緊密な連絡を執り、瀬戸内海では忽那・村上・土居・得能氏や、伊勢の熊野水軍、また肥後の菊池・阿蘇等と充分提携して瀬戸内海以西の制海権を掌握した水軍を確保し、ひいては官方の九州における活動に貢献したいとするものであった。

懐良親王一行の忽那島出発について、従来、いろいろと論議されてきた。興国二年九州渡海説、興国三年渡海説である。

私は何れも正しいように思う。忽那文書の中に、省略された「忽那一族軍忠次第」があった。

(前略)

- 一、同御手人十二人、衣裳兵糧沙汰事三箇年
- 一、勘解由次官父子鎮西渡海事
- 一、中院内大臣法眼御房渡海事

軍忠状には「勘解由次官父子云々」「中院内大臣云々」と別記され、本隊渡海と相違する渡海であったことが窺

える。

親王方は、忽那島にあっても九州の情勢は充分探査していたと思うが、情勢変化の激しい時代で、阿蘇や菊池の実情を充分把握し、南朝方の拠点にせねばならない必要から、親王本隊の九州渡海前の興国二年(一三四一)初め、五条頼元親子を九州に派遣したものとと思われる。中院内大臣もやはり同様の理由によって、別途派遣されたことだろう。

その渡海船が、九州東海岸に二月頃到着したもので、熊本県史によると、

「興国二年二月、征西將軍九州東海岸に到着、八月には五条頼元から恵良惟澄に九州の軍事を依頼し来る」

と誌されてあるのは、これを立証するものであろう。

懐良親王の西下の目的は、まず肥後に入られることであつた。それは、肥後国が九州の中央で鎮西支配に最適であること。南朝は、内侍所(賢所)のことで、三種の神器のうち、神鏡を安置した宮殿で、内侍が奉仕したので内侍所という)を比叡山においてあり、阿蘇の西巖殿寺は古くから比叡山の末寺であること。

かつて阿蘇惟時・菊池武時等は、尊良親王を奉じて九

州探題に対抗せんとしたことがある程、南朝勢力の中心と考えられていたからであろう。

こうして懐良親王方の五条頼元父子は九州東海岸に到着した。忽那党の援助によるものである。

五条頼元は、阿蘇氏の家督惟時が態度を明確にしないので、惟時の庶子惟澄に頼ることにした。惟澄は恵良惟澄と呼ばれたが、恵良は阿蘇南郷の地名である。惟澄はここを分割譲与されていて、惟時に最も近い庶子家筋といわれ、また惟時の女婿であるともいう。

惟澄は当主惟時とは別に、弟惟賢・惟雄（惟雄は惟賢と別人であろう）等を率い、菊池氏と連絡をつけ、南朝服属することを決定した。惟澄の南朝加担の報が伝わり、阿蘇氏内部は、勿論各所に影響が生じ、俄かに情勢が変わってきた。

建武三年（一三三六）のこと、足利尊氏の御教書によって、阿蘇氏の伝統を破る庶子の大宮司職として孫熊丸が補任されていたが、惟澄の南朝加担を知るや、孫熊丸は庶子層数十人を語らい惟澄に挑戦してきた。忽ち南郷の戦が始まり、孫熊丸が戦死して惟澄の勝利に終わった。彼の大宮司職は弟乙房が継いだ。

南朝方としては、惟時の向背が常に問題となり、惟時を誘う努力は繰り返えされていた。

惟時は、阿蘇氏の浮沈を考えてか決断しなかった。従って、南朝方では惟澄を大宮司職に補任せざるを得なかった。かくして阿蘇氏は惟時の中庸派と三つに分裂してしまった。

興国三年（一三四二）の初め、懐良親王の本隊は、忽那義範の指揮する水軍に護衛されて九州東海岸に着き、ここで五条頼元から九州の情勢の報告を受け、一諸に薩摩に向ったものと想像されるのである。勿論菊池・阿蘇氏の動静を確認してからの本隊渡海であったと思う。親王にとってそれ程危険に満ち、容易ならざる南朝情勢下の九州渡海であった。

四 九州の東海岸について

東海岸とは何処を指すのだろうか。当時、南朝勢力の不振の折り、親王方の安全な場所はそう多くは無かった。佐伯領こそ安全地帯で、米水津（粟島伝説も考え）から蒲江辺りの海岸を指し、五条頼元等の本拠を置いた場所は、急坂を避けて市福いちぶせあたりと考えてよいだろう。米

水津・蒲江海岸は屹立し、その山道は厳しいものがあり佐伯氏や阿蘇氏との連絡には不便が多く、市福所あたりと考えて無理だろうか。佐伯―竹田―阿蘇。佐伯―緒方―阿蘇。その外、良いコースが考えられたのではあるまいか。

阿蘇氏の内部事情が複雑で、南朝服属までには相当の時間と努力が必要であった。多少前後するが、阿蘇氏内部に触れてみると、

正平三年（一一三四八）菊池に於て、親王が征西府を樹立した時でも、尚、惟時の向背は不明であった。かといつても、一月十四日、親王の御船到着には惟澄と共に惟時も出迎えていた。

惟澄にしても、恩賞権を持った征西將軍の直接の親衛軍となった菊池武光が、阿蘇神社に願文を捧げて、惟澄に領地を確約した正平三年四月から、ようやく本当に親王のために立つことを決意したといわれる。問題は、兵を率い、兵を養うために必要な所領であり、恩賞であった。勢力の拡大に比例して、所領は必要になってくるのである。

こうして、当時の武士の立場を考えてみると、五条頼

元の阿蘇氏の服属交渉は容易なものでなかったことが解る。交渉は難渋を極め、相当の時間がかかったことだろう。

高千穂太平記（西川功著）に、

興国三年五月一日、征西の宮、五条頼元等薩摩の津に到着、谷山城に入ったとすれば懐良親王の行程に一年程の空白が生ずる。これは豊後から日向の沿岸の何処かに居られた訳である。

と述べてある。

この一年の空白こそ、阿蘇氏との交渉、菊池氏との連絡等に費され、本隊渡海の準備をされたものだろう。

興国三年（一一三四二）五月一日、親王一行は谷山隆信に迎えられ、谷山城に入られた。

興国四年、後村上天皇は、忽那島の義範に対し、備後国安田郷地頭職を懐良親王援助の勲功の賞として与える諭旨を発せられた。

谷山城入城五年後の正平二年（一一三四七）十一月、親王は谷山城を出られて、薩摩半島を西に廻って十二月八代沖に入り、宇土半島を迂廻して、正平三年正月二日、住吉の津（宇土郡網津村）に到着された。この航海には、

中国・四国の得能氏・河野氏らの水軍の護衛があった。

このような瀬戸内海以西の水軍の活動の中で、今後の菊池氏の広汎な活動が展開されていった。

菊池武光・中院義定は、住吉に行つて親王の御安着を祝した。正月十四日、親王方は宇土を出られて益城郡御船に於て、出迎えた惟時・惟澄に会い、菊池一族に護られて菊池に入られた。

阿蘇惟時は一時北朝方につき、惟澄とも戦つたこともあったが、正平三年には、惟澄にすすめられて、惟時も親王の菊池入りを出迎えたのであった。

正平三年四月、菊池に於て征西府が定められた。菊池一族・阿蘇惟澄の活躍によって、正平六年以降は、九州南朝勢力は強大となってゆくのである。

(四) 附記 若干

明治の世になつて、阿蘇惟澄の忠節に対して、明治政府は、正四位を贈つたのである。

本文中に述べた阿蘇の西巖殿寺は、古くからの比叡山の末寺であつた。天授元年（一三七五）懐良親王がこの寺に貴重な仏舎利を寄進された。その渡し状が保存され

ている。阿蘇氏が、南朝勢力の基幹であつたことを物語るものである。

愛媛県御荘町の町史によると、懐良親王は、興国三年五月に、土佐幡多より薩摩へ上陸し、佐伯へ引返し、肥後の勤王党の菊池一族を頼り繪旨を伝えたとある。その正誤はおくとしても「佐伯」は注目される歴史地理的位置にあるといえよう。

